

## 衛星余話(4)

水野 秀樹

### (8) 硫黄島

硫黄島は東京から南に約800kmの所にある島だ。第二次大戦中、山の形が変わるほど米軍の艦砲射撃を受け、また、星条旗を島に立てた戦士の模様が写真や銅像になっているので有名な第二次大戦の激戦地である。現在は自衛隊と米軍が駐留し、様々な訓練、日常業務に当たっており、テレビ、ラジオでこの島の名前がでるのは、『横田基地での艦載機離着陸訓練を硫黄島で出来ないか』と言うくらいで、あまり話題に上ることはない。しかし、この島には公衆電話がある。

隊員の福利厚生の一環だと思うが衛星通信を用いた公衆電話があり、東京都内の公衆電話と同じ料金で通話ができる。郵便ポストがあったかは記憶にない。この公衆電話を収容する衛星システムの更改のため、平成5年(1993年)1月に硫黄島に行った。

この島へ行くには自衛隊機で入間基地から飛んで行くしかない。前日、入間の近くのビジネスホテルに投宿し、朝、基地に入った。事前書類で島への通行は認められていたが、飛行機に搭乗する前に本人確認があり、その後、認識票を渡され首に掛けた。良く戦争映画に出てくる認識票で、いざ自分の首に掛けられると、少々緊張してしまう。飛行機の機種は記憶にないが、電車やバスの様に、あるいはパラシュート部隊の様に、お互い向かい合って進行方向に対して横にすわった。飛行機での横ずわりは初めてだったが全く不安は無く、飛行は快適だった。ただ、背中に窓があるので、外の景色が見辛いのが難点だ。

午後、現場のNTT局舎を点検し、晩御飯の時間になった。自衛隊の皆さんは体を鍛え、体力を維持することが重要だからか、晩御飯は何とステーキだった。その日だけだったのかも知れないが、ボリューム満点でとてもおいしかった。しかし、晩御飯を食べ終わったのは5時。「さあて、これからどうしよう。」「シャワーがありますよ」と言ってもらったが、いろんな“もの”に出会うとの事で、使う勇気もなくベットに入った。

翌日も作業。若干時間が出来たので、車で島内を案内してもらった。「ここが日本軍の塹壕の後ですよ」と案内され、1.5m径の塹壕に入った。入り口から1mも入っていないのだが、内は暑い。塹壕は延々と繋がっているのだが、この中に入っていた兵士は何を考えて戦っていたのだろうか、と思った。日本に居る家族や友人の事、食べ物、目の前の米軍のこと、等か。単に命令という事だけで戦ったのではない、なにか個人の意思で「守る」ものを持っていたのではないか。そんなことをふと思った。

それから、小高い山に登り、星条旗を立てたと言われる場所を見、戦没者の霊を慰める記念施設を訪れた。島が一望できる所で、慰霊の場所としては最適だと思う。そこに歌碑があったのだが、誰かの歌が刻まれていたように記憶している。童謡や唱歌ではなかったような気がするが、定かではない。

その場に暫く居たのだが、やはり暑い塹壕で戦っていた兵士の事が気になっていた。何を守ろうとしたのか、そしてそれは守られているのか。当時より、物質的には、あるいはハード面では、比較にならない程豊かな生活を送ることが出来るようになったのだが、その分精神面、ソフト面では当時の人達より貧しくなっていないのだろうか。それとも今も形を変えた戦争が続いているのだろうか、勝敗がつくものなのか、…。「この島をリゾート開発して、若い人達にも過去を知ってもらおうことは出来ないんですかね?」「それは難しいと思いますよ」。

この塹壕の経験が今も記憶に残っている。

## (9) トゥーカン

ロケットの打上げはとても印象的だ。地球の引力から脱出し、まさに母なる大地から全力を振り絞って宇宙空間に飛び出して行く、その瞬間だ。私は長い間、衛星関係の仕事に携わって来たが、残念ながら打上げは一回しか経験していない。今回はそのお話しをしたい。輸送手段が無いとモノが運べないのは自明のことで、衛星も今のところロケットが無いと宇宙空間へ飛び出して行かない。初めて、ロケットが飛ぶのはETS - IVの打上げの時に経験したが、それも射場で見たわけではなく、遠く離れた所からロケット追尾アンテナの動きを見て「飛んでいるな」と感じる程度だった。しかし、それでも十分に打上げを体感できるものだった。

ETS - VIIIは直径13mの超大型展開アンテナを2面搭載し、2004年(平成16年)打上げを予定している。この技術試験衛星は様々なミッションを搭載し、移動体衛星通信や高精度位置検出などの実験を計画しているが、それらを遂行する上でこの大型展開アンテナが無事展開することが必須となっている。このため、基本設計に問題がないか、スケールモデルを作成し宇宙実験することになった。展開後の直径が約5mなので、約1/3スケールモデルに相当するが、モジュール数も7モジュール、材料、展開機構も全く本物と同じものを打上げることになった。

打上げはアリアスペース社にお願いし、ピギーバックとして打上げることになった。ご存知のとおり、アリアンロケットは南米仏領ギアナから打上げられる。ほぼ赤道直下で場所としては最適だ。しかし、ここへ行くにはフランスからの直行便とカリブ海の島づたい、の2ルートがあり、時間の面では直行便の方がずっと早い。私もパリから現地入りした。

フランスは不思議な国だが、冷戦時代から不思議と第三勢力とうまくチャンネルを築き、友好的な関係を維持している。冷戦時代での共産圏諸国、アラブ・アフリカ諸国。外交の上手い国だと思っている。仏領ギアナ行きの飛行機はシャルルドゴール空港から飛び立つのだが、第一ノ第二ターミナルのいずれでもない、第三ターミナルからの出発だった。このターミナルは、上記の様々な国とのハブ空港となっているようで、様々な民族衣装や、肌の色をした人が行き交っていた。「なるほど、こんな地道な交流を続けているんだ」と思った。

いよいよ打上げの当日になった。打上げは午後8時頃で、それまでに射場、コントロールセンタ、などを見学し打上げ1時間前に見学地点に到着した。打上げはTV中継され、カウントダウン、衛星分離、打上げ後のインタビュー等々、TVショーの様にプログラムされていた。打上げ成功に裏づけられたものなのか、ラテン系の文化なのか、企業の余裕を感じる時間だった。

仏領ギアナには、熱帯地方特有の野鳥が生息し、それぞれの見学地には野鳥の名前が付けられている。私が見学した場所はメイン会場だったが、その名前が「トゥーカン」だった。先日、パリに出張した際、このトゥーカンを描いた絵皿を偶然見つけることが出来、早速購入した。この皿は、今、我が家の玄関に彩を添えている。

## (10) 余話

全4回にわたり、私の身近で起きた衛星通信開発の「余話」を書かせて頂いた。これからも今までと同様、我が国の衛星通信が益々活況を呈し、技術開発面で国際社会をリードして行くことを祈念して止まない。